
ゼロの使い魔 - 刀を持つメイジ -

いちじく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 - 刀を持つメイジ -

【Nコード】

N9068V

【作者名】

いちじく

【あらすじ】

この作品には、独自解釈や独自設定や独自ルート
オリキャラ、
オリアイテム、
オリ魔法、などが含まれます。
それが嫌いな人は戻るをオススメします。

始まりは、トリスティン魔法学園入学からです。

数々のマジックアイテムを出す予定です
それでは、よろしくお願いします。

オリジナル主人公（前書き）

いろいろ追加していきます

オリジナル主人公

名前：カザネ・フォンリーフ

二つ名：未定

性別：♂

容姿：癖毛の黒髪ショート 赤目

魔法：風と水のドットメイジ

趣味：読書と薬の調合

好き：睡眠、本、薬

嫌い：ヴァリエールの人間、宝竜

持物：風鉄扇（杖）

：風（日本刀）

：黒ノ夢（魔本）

：自家製ポーション（回復薬）

：美風印の万能薬

怒る事

殺 敵 普

????????

？）母を侮辱されること

？）睡眠を邪魔されること

？）作った薬を捨てられること

？）卑怯者と呼ばれる事

？）平民と呼ばれる事

セリフ「俺の睡眠を邪魔するなら、いくら神であっても許さない」

セリフ2「今は、俺に殺してくれっていう合図でしょ？」

マジックアイテムを持っているのは母が冒険家だったため。

オリジナルマジックアイテム（前書き）

マジックアイテムってながいよね

魔法薬は後日追加予定

オリジナルマジックアイテム

名称：エルフの枕

形状：普通の枕

効果：頭をおいて眠った者に対して先住魔法の『カウンター』をは
る。

名称：風鉄扇

形状：手のひらより少し大きめの扇の形、色は、柄は

（閉）幅3cm×長さ30cm×厚さ2cm

効果：『ウインド』の効果のみを上げることが出来るマジックアイ
テム。

ドットメイジが持つても人を吹き飛ばせるほどの効果を誇る

名称：黒ノ夢

形状：B6サイズ。黒の手帳。

効果：睡眠中のみ使用可能。時間感覚は現実と同じ。

初めて触れる者は強制的な睡眠に襲われ

管理者に認められない限り永遠に起きることが出来ない

管理者に認められれば、本の中で修行することが出来る。

中で死んだら、現実でも死ぬ。

中で強くなれば、現実でも強くなれる。

修行の効果は、起きたときに反映される。

裏 攻撃的な人格をコピーすることが出来る本。

コピーするためには、管理者を倒さなければならない。

名称：罇

形状：黒の鞘に入っている

効果：後日記述

その男、黒髪（前書き）

初投稿になります。

至らないところしかありませんが、がんばりますので誤字脱字、感想や評論をよろしく願います。

目標は、【完走・胸熱展開・泣かせる】。をモットーにやっています。

その男、黒髪

気がついたら眠っていたらしい。

まぶたを擦り体を起こすと、向かいの席に座っているセバスが声をかけてきた。

「坊ちゃん、もうすぐトリステイン魔法学園に着きますぞ」
「どーでもいい」

どうにも、起きたばかりで頭が働いていないようだ
ゆっくりと現状を確認していると

しだいに頭が覚醒しだした。

途端に全身を針で刺されたような痛みが襲う。

頭が痛い。

首が痛い。

背中も痛い。

腰とか末期だ。

とにかく全身ピクピク痙攣している。

「なあ、セバス」

「なんですか、坊ちゃん」

「なんで、そんなにうれしそうなんだ？」

この、白ヒゲ白髪でにやけ顔の執事はセバスという。
黙っていれば、それなりのダンディズムを
かもし出す立派な執事なのだが
口を開くとただの変態だ。

曰く、「幼女は手折るのではなく愛でるものですぞー」とか
曰く、「絶壁には絶壁なりの美しさがあるのですぞー」とか
曰く、「どんなに優れた絵であろうと、我が妄想よりは劣る」とか
どうやら、過去に東方から流れてきた書物の”変態紳士道”
という本を読み出しておかしくなっただけらしいが……
仕事に全く影響が無いのがすごいと思う。

それにしても、にやけ顔もダンディーってうらやましすぎるわ。

「我々使用人一同、この日をどれほど待ち望んだか……」
「なかば、強引に入学させたじゃねえか」
「奥方様は手を抜いていたと、おっしゃっていましたよ」
「嘘付け、手を抜いたメイジが、
武器を使わない孫相手に”ウィンディ・アイシクル”とか使う
けねーだろ」
「ほっほっほ、どうであれ、我々一同がうれしいのは事実でありま
す」

まったく、困ったヤツだ。
そこまで期待されちゃあ、三年間やめねえじゃねえか。

マントの内側にある自家製ボトルを取り出し自身の体に振りかけ
る。

「ヒーリング」
呪文を唱え終わると全身の痛みが和らいでいく。
数十秒で直るだろう。

”自家製回復液”と俺の魔力ではこのスピードが限界か……
。

「お見事、呪文を唱えるそのお姿は、まるで”ミカゼ様”を見ているようにございました」
「いいや、まだまだ、あの”慈愛”に追いつくには俺の力じゃたりんよ」
「ほっほっほ、相変わらず”カザネ様”はマザコンですな」
「まあ、母に劣らないように黒髪とこいつが、似合う男でありたいと思っているがね」

左腰に差してある母の片身”凧”を見てそう答える。

「ニホントーでしたかな？」
「ああ、命の次に大切な宝だ」
セバスは、優しい瞳をこちらに向けて視線をずらし横に置かれている本を見て何か言いたそうにした。

「その次は、黒ノ夢だな」
「坊ちゃんはその本が好きですね」
「ああ、これは、いい本だ」

「そちらも、片身でしたな」
「ああ、あと”鈴紅”もあればいいんだが」

「坊ちゃん、”宝竜”は危険すぎます！！」
セバスは目を見開き、俺の両肩を両手で掴む。

「わかってるよ、セバス。
力を手にするまで、あいつに預けておこう」
「本当ですか」
「ああ」

両肩を掴んでいた、セバスの両手が離れる。

「二度とあんな事はしないよ」

過去に一度挑んで死にかけたのは、いい黒歴史だ。

あの時に、”風鉄扇”を持っていたら、少しは変わったかもしれないがな。

まあ、過ぎたことをうじうじ悩んでも仕方が無い。

そんなことより、

「なあ、セバス」

「なんですか、坊ちゃん」

「あの、ヴァリエール家の三女も、入学と聞いたんだが」

「そうでございますな」

セバスは、一瞬瞳に黒を宿したが。

瞬時に目をそらし、外を眺める。

「なーに、こつちからちよつかいをかけるような事はしない」

まだ未熟な俺では”烈風”の相手はできないからな。

だが、いずれ必ず俺の手でヴァリエールを潰してやる……。

「カザネ様、見えましたぞ」

「ああ」

あれが、トリステイン魔法学園。

これから俺が三年間を過ごす学舎か

5つの塔から伸びる外壁に囲まれたその姿は

まるで、要塞だな。

「フォンリーフ家の次期頭首としてふさわしい振る舞いをお願いします」

「まあ、継ぎたいわけではないのだがね、家名に傷をつけないようにはしよう」

入場は何の問題も無く終わった。
使用人であるセバスは、
俺と別れると実家に帰って行った。

「ちょっと、よろしいかしら、ミスター……………」

入学式の最中、眠っていると。
隣の席の女から、声をかけられた。

「俺か？」

「ええそう、貴方」

重い瞼を上げて声のした方を見ると燃えるような赤髪の女性がいる。
た。

胸元を無駄に開き、健康的な褐色の肌を見せつけてくる女性。
どうやら、俺を誘惑しているようだ。
多分この黒髪が珍しいのだろう。

「フォンリーフ、16歳。

ドッドメイジだ、趣味は、読書と調合

ごらんのとおり、田舎の地から出てきた身でね

あいにくと”貴族”同士の礼儀やら何やは、そこにおいてきた。
他に聞きたいことはあるか？」

赤髪の女性は、少し驚いた表情を見せたが
すぐに冷静になり名乗った。

「失礼、ミスターフォンリーフ。

キウルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェ
ルプストー。

ゲルマニアからきたわ、

それで、「すまないが、その話は長いか？ 私は寝不足でね、そ
の話が俺にとっておもしろい話なら続けてくれ」」

キウルケは、誘惑した俺の態度が気に入らなかったのか、

自慢気に赤髪をなびかせると今度は反対の席に座る小柄な青髪の
女性にちょっかいをかけ始めた。

あの小柄な青髪の子。

どこかで見たことある気がしたが、
多分気のせいだろう。

それよりも俺は眠いんだ。

．．．．．。

．．．．．。

．．．。

「ウ、ウルサイ」

誰かの怒鳴り声が聞こえる。

こっちは、眠たいんだ．．．．．。

少し目を開けるとキュルケが本を片手に笑い転がっていた。

その横で小柄な青髪の少女が、

獲物を狩る狩人のような目でキュルケの持っている本を睨んでいる。

俺は、素早くキュルケから本を取り上げると、

パラパラとめくり”内容を覚える”

”風の力が気象に与える影響とその効果”か、おもしろい本だ”
「え？」

キュルケは本を盗られた事に気がつかなかったようで
驚いた表情でこちらを見ている。

「これは、君の本か？」

キュルケを無視して

青髪小柄な少女の方に視線をやると。

少し驚いたような顔をして頷いた。

本を少女に手渡す。

「……ありがとう」

小柄な少女は少し照れたような表情をして礼を言うてくる。

「なーに、気にすることはない。」

それで、相談なのだができれば同じような本を貸してほしい、
急な入学だったので実家から本を持ってこれなくてな、

二、三日まっていれば届くと思うのだが………そういえば
名前を聞いてなかった」

「………タバサ」

「ミスタバサ、俺はフォンリーフだ。本の虫同士仲良くしようではないか」

キュルケは、自分がおいて行かれているのが気に入らないようで
フンッと鼻をならすとどこかへ行ってしまった。

「君たちは、ソーンクラスだ！」

教師がこちらによってきてそう言っていると俺とタバサは移動を始めた。

タバサと話している最中、視界の端に小柄なピンクの髪の少女が見えていた気がしたが多分気のせいだろう。

その男、平民

何の問題もなく入学式も終わり、
授業が始まった。

正直だるいが、授業に出ないと家名に傷がつくので嫌々出ている。
まあ、枕を持ってきているし

寝る場所が変わったと思えばなんとか耐えられる

そして、貴族っていう人種は群れたがる
っていうのは、ここ数日でよくわかった。
か弱い弱者をいたぶって、そんなにおもしろいかねー

なんか、俺は、平民と呼ばれている。

黒髪

授業中に眠る

授業が理解できてない

魔法が使えない

変わった剣を腰に下げている

平民

って事らしい。

教師もそれを黙認してるっぽいようだ。

一度、教師の一人が魔法で起こそうとしたようだが、
俺が持つてる枕がマジクアイテムであったため
放った魔法が跳ね返ってきて大変なことになったそうだ。

まあ、大変な事になる程度の魔法を生徒に放った
教師っていうのは馬鹿以外の何でもないと思いますねまったく。

ある日、

教室の一角で女生徒グループが、一人の女性を囲むようにして陣
取っていた。

囲まれている女性の顔には見覚えがあった、キュルケである。

聞きたくもない音が耳に入ってくるのは本当に面倒くさい。

話を聞く感じ、恋人が取られたとか、付き合い方に気品がないとか
正直どーでもいい話ばかり。

俺の睡眠を邪魔することだけはやめてほしい。

おまえらの、そのヒステリックなしゃべり方は耳の中に残るんだよ
てなわけで、言っちゃったね女生徒連中に

19

「恋人が取られるのは貴女達が、女を磨く努力をしないからだ、

ミス、ツェルプストーを見ろ、彼女は貴女たちが抗議している間も
爪を磨き、髪を整え、口紅を塗り、女を磨いているではないか

君たちの魅力は、彼女の努力に遠く及ばず

たとえるなら、石と宝石ほどだ！！

道に落ちているただの石に誰が目を掛ける？

磨き抜かれた宝石の方がいいに決まっているではないか」

「と言うわけで、俺の睡眠を邪魔しないでくれ……………」

翌日から、なぜかわからないが、

男子生徒から決闘や弟子入りを申し込まれるようになった。

勝手に騒いで、勝手に申し込んできて、断ると卑怯者呼ばわり男ってというのは、よくわからんな。

SIDE：タバサ

教室でいつも隣の席にいる彼はおかしいと思う

授業には出ているが、いつも眠っているか、

寝ながら本を読んでいるかのどちらかである。

魔法を使う所を見た人がいないため平民なんて呼ばれている。

それで、怒るわけではなく

「平民か」

つと、ちよつと気に入ったような表情をしていた。

ある日、ツエルプストー家の女が、

彼氏を取られた女生徒たちに囲まれていた

まったく興味が無かったため、読んでいる本に集中していたがいつも寝ている彼が立ち上がり、彼女たちを言いくるめた。

その日から、あの平民に勝つと

ツエルプストーと付合う権利を得られると言う噂が広がった
そのため彼は、数々の男子から決闘を申し込まれるのだが。

「平民、ボクと決闘だ」

「めんどくさい・・・zzzz」

「平民、ボクのために負けてくれ」

「どーでもいい・・・zzzz」

「平民、君の言葉に感銘した、師匠と呼ばせてくれ」

「まずは、友達からで・・・ZZZ」

一度も、決闘を受けたことがないため卑怯者と呼ばれていた。

一度彼に、なぜ平民や卑怯者と呼ばれているのに怒らないのかと聞くと

「それを許すことで俺の睡眠が守られるなら、どーでもいい」

そういつて、微笑み、枕に頭を沈めていた。

やはり、彼はおかしい。

その男、風使い（前書き）

少しずつ、オリジナルを混ぜていきます。
アイテムとか魔法薬とか考えるのが凄く楽しいです。

その男、風使い

今日、カザネ・フォンリーフはすぐ機嫌が悪かった。それは、別に目覚めた時に寝違えて首が痛いとか朝から、卑怯者と呼ばれて少し気が立っていたとか朝食のパンが一つ少なかったとか、嫌いなスープだったが残さず全部食べたとかそんな小さな理由ではない。

「今日は、風の魔法の初回の授業だ!!」

それだけなら何の問題もない。

いつものように、「エルフの枕」と「黒ノ夢」を使い睡眠学習をすればいいだけである。

ただ、今日の授業は少し違った。

場所である、いつもなら教室で受ける授業が、

この初回風魔法の授業に限っては「中庭」で行われるのだ。

始め彼は、中庭という場所において風を感じて眠れるならとても気持ちがいいんじゃないか？

と浮かれたが、いざ寝ようとして外に出てみると

どうにも日の光が強すぎた。

眩しすぎて眠れない……………。

最悪であつた。

だが、家名に傷がつくと思つたため授業を休むという選択肢はなかった
誠に不本意であるが、彼は授業を真面目に受ける事にした。

そう、”眠れない”という事で、
結構ストレスがたまっていたため、すごく機嫌が悪かったのだ。

「今年の生徒は不作だ」

授業開始直後に教師ギトーは、そう言った。
ドットメイジの自分からしてみれば

まあ、確かにその通りであると頷けた。

周りにいたプライドの高い生徒連中からは

（こいつは何言ってるんだ！）

という表情が見て取れる。

「君らには、全く期待していないが、

これからフライとレビテーションの授業をする」

（フライとレビテーションねえ。

効率の悪い魔法は使ったこと無いが何とかなるかね）

内心そんなことを思いながら、

脳内の隅から呪文を思い出していると。

「では、始めたまえ」

教師ギトーがそう言ったので、

刀ではない方の腰に差してある、

マジックアイテムである杖の”風鉄扇”を抜き。

呪文を詠唱して振るう。「イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ」

「フライ」

30サントほど浮かんだ。

どうやら、呪文は合っていたようだ。

しかし、普通の呪文は精神力の効率がわるいな
持続して飛び続けるのは精神力がもつたいないから
すぐに地面に足をつけた。

気がつくと周りの生徒連中がポカーンと口を開け
アホみたいな顔をしてこちらを見ていた。

「なんだ？」

「き、君は魔法が使えたのか？ それよりも、”ソレ”はなんだ」
一人の生徒が口を開く。

今にも迫つてきそうなその表情は、なんとというか、すごく気持ち
が悪い。

その視線は一般的な杖とは異なる”風鉄扇”をとらえており、

（当たり前だろう、魔法が使えないものが
この学園に入学できるわけじゃないか！
平民と言つたあだ名は本気でいつてたのか？）

と言つた台詞が、頭の中に浮かんだが。

今日は機嫌が悪かったので、

「ごくごく」一般的な杖”だが、何か問題があるか？」

そう言つてやった。

生徒連中の、（それが、一般的なわけあるか）

という表情を見て、内心すごく楽しんだ。

一般的に杖というのは、ワンドやスタッフ、指輪といった物を
使うものが多いが、

俺のように、自分の趣味に合わせた特殊な形状の物を使う者もい
る。

「なんだ？ 貴族ともあろう人間が”コレ”を知らないわけ無いよ
なあ？」

貴族という言葉を使い。

生徒連中に、”風鉄扇”がマジックアイテムであるという
情報を漏らさないようにした。

プライドの高い連中が、
すごく悔しそうにしているその表情を見るのは、
とても心地かった。

そんな事をしていると、

生徒の視線が自分以外に向いている事に気がついた。

上空に浮かぶ青髪の少女。タバサである

タバサは、誰よりも早く高く飛んでいたようで

「『ドット』にしては、なかなかやるではないか」

教師ギトーから、

不本意だがお前を認めてやろうという評価をいただいていた

「クラスで一番若い生徒に負けてくやしくないのかね？」

続けて教師ギトーは言う。

それは、生徒たちをやる気にさせるには十分過ぎるほどの言葉であつた。

昼休み、

風の授業の時は、日の光が強すぎて眠れなかったのだ。

木陰の下に枕を持ち出して眠ることにしたのだが、小柄な青髪の先客がいた。

「隣いいか？」

タバサは、本に集中していたようで、こちらの声は届いていないようだ。

「沈黙は肯定とみなす！」

そういうことで、おじゃまします。

そしておやすみー」

枕に頭を沈める瞬間

タバサが、微笑んだように見えたが多分気のせいだろう。

頬を撫でる心地のよい風と、木の香りのおかげで

黒ノ夢に入るには、10秒とかからなかった。

「よくきたな、三代目風”風音”よ」

「よろしく願います、師匠」

睡眠中に何百万回と繰り返し返してきた、このやり取り。

「前にも言ったが、今、お主にできる限りの技術はその体にたたき

込んだ」

「故に、我と全力で死合い、己の術を見つけよ」

「わかりました」

「構えよ、カザネ」

「ツハ！」

「九鬼流・風・”風車”かざぐるま” 押して参る！」

黒ノ夢は、攻撃的な人の人格をコピーする本である。

コピーされた人格は、管理者となり

読む人間に過去の技術を伝えられると言われている。

黒ノ夢は、その管理者に認められないと読む事ができない。

初めて本に触れた瞬間、強制的な睡眠に襲われ、管理者に試される。

認められれば、本の中で自由に行動できるようになるが

認められなければ、二度と目覚めることは無いという。

まさに、諸刃の本である。

今現在この黒ノ夢の管理者は、一代目風こと”風車 かざぐるま”である。

彼は、東方の地より、二冊の本と二本の刀を持ってこのハルケギニアに流れ着いた。

いくら前の世界で、凄腕の刀術、九鬼流を習得していたとしても

この世界で魔力を持たぬ彼は、ただの人であつた。

異国の地より流れ着いた彼は、言葉を覚え、流人となり、元の世界に帰るすべを探して何とか生き抜いた。

その旅の途中に一人の貴族と出会う。

貴族は、オーク鬼の集団に襲われており精神力も切れていたようだった。

風車は、いち早く刀を抜き、貴族の元へ駆けつけた。

「弱肉強食の理においてお前らを喰らう」

そういつて、刀を正面に構え

疾風にも劣らぬ早さで

次々とオーク鬼の首を落としていった、

その姿をみて貴族が呟いた。

「まるで、風のような」

その時生まれたのが

ハルケギニア用刀術 風。

後の、九鬼流・風・である。

その男、教育する（前書き）

マジックアイテムの説明入れるの忘れてた。

一章が終わったら最後に入れます。

別に、まだ、書いてないとかそんなんじゃないんだからね！！

今回結構ダークです。

その男、教育する

「ミス、貴方に風をご教授願いたいのだが」
という男の声で目が覚めた。

（俺は、男だ）

と思って口を開こうとしたが、
隣にタバサがいることを思い出して、堅く口を閉ざした。
危うく、恥をかく所だったぜ。

しかし、タバサは答えない。

本をめくって続きを読むあたり、
意図的に無視しているようだった。

あれほど、高く早く飛ぶ風魔法使いが、
今のセリフを聞き逃す事なんてあるわけ無いのだから。

彼は、タバサの態度が気に入らなかったのか。
次々に、挑発するような言葉を吐く。

「僕が、ものを頼んでいるのだ、答えるのが礼儀だろう？」
「怪我をするのが恐ろしくて、試合をできないのだろう？」

それを聞き流す彼女の姿は、
大人が子供の屁理屈を聞いているような感じだった。
一瞬、小さなタバサが大人のように見えて少し笑ってしまった。

「なんだ、平民。少しでもおかしい所があったか？」

いつの間にか、彼の矛先が彼女ではなくこちらに向いていた。

「いえいえ、貴族様。 なんでもありませんよ」と普通にいつて。

「別に、小さな子供が屁理屈をこねて親を困らせている姿に見えて笑えてしまったとか、全然そんなことはありませんよ」と、淒く小声で言う。

「っふ」

一瞬、ほんの少しだけタバサの表情が崩れる。が俺の視線に気がついたのかすぐに冷静になり、本に顔を隠した。やっぱり声は、聞こえているようだ。

「きみがどうやら私生児というのは本当のようだ。おそらく母の顔さえ知らんのだろう。それとも、その平民と同じで”卑しい母”の元に生まれたのかな？」

ハッハッハ」

下品な笑みを顔に浮かべ、彼が立ち去ろうとした。

平民

でも魔法が使える

態度が低い

どこかのエロ貴族に使えていた使用人が身ごもった卑しい身分

という感じかな、あいつの頭の中はさ。

さて殺そう！！

俺の母を馬鹿にするヤツは死んでも仕方ないよね？
でも、簡単に殺しちゃだめだよ。

そうだなーまずは、両腕両膝を切って血止めしよう
そして動けなくなった所で・・・・・・そうだ新しい、薬の実験台
にしよう。

まだ、腕をはやしたり足をはやしたりする
薬を作ったことがないからなあー。

どうしようかなあー。

迷うなあー。

が、隣からの発せられる冷気で我に返った。

静かに立ち上がり、冷気を発するタバサがそこにいた。

「・・・・・・・・タバサ？」

「おや、やる気になったのかね？」

糞虫はそう言くと、タバサをみた。

タバサは持っていた本をこちらに寄越すと、
中庭で、開けた場所に移動した。

「グイリエ・ド・ロレーヌだ」

杖を構えて糞虫は自信に満ちた声で、高らかに名を告げる。

対するタバサは、名乗ろうとしない。

「決闘の場において名乗る作法も知らない所を見ると、やはり、”卑しい身分”のようだ いざ！」

そう言つと、呪文を紡いで『ウィンドブレイク』を展開する。

展開された『ウィンドブレイク』がタバサに迫る。

タバサは、一つの呪文を紡いで杖を振るつた。

展開されていた『ウィンドブレイク』は、

放つた術者である糞虫の元へ帰つた。

自ら放つた魔法をくらうとは、哀れ糞虫。

壁に叩きつけられた糞虫を追撃するタバサ。

呪文を唱え、無数の氷の矢を放つ。

しかし、その矢は体に刺さることはなかった。

「……私の勝ち」

タバサは静かにそう告げた。

その場にいた誰もが、その結果を認めた。

試合が終わるとタバサがこっちに来て

俺の手元に合つた自分の本を欲した。

そして、小さく呟く

「……次は貴方」

ああ、俺が冷気を感じていたように、

タバサも俺の殺気を感じていたのか。

だから、とどめをささずに糞虫を残してくれたのか。

「ありがとう、タバサ ちょっと、教育してくる！」

俺は、本を手渡すと先ほどまでタバサが試合していた所まで歩いた。

そして、マントに無数の氷の矢が刺さって動けない糞虫が矢を抜かれるのを待った。

「糞虫、えっと名前なんだっけ？」

そう、お前。今自分の放った呪文を自分にうけて、侮辱していた相手に惨めに負けたお前だよ」

「ヴィリエ・ド・ロレーヌだ」

先ほどの自信に満ちた声ではなく、悪いことをして親に怒られたばかりの子供のような声であった。

「なんでもいいや、お前俺と決闘しろよ！」

「な、今僕は負けたばかりで、傷の治療もしないといけないし」

「じゃあ、早く治療してこいよ、まさか逃げないよな？」

「先ほどの試合で疲れていて、今日はもう無理だ！」

「あー、平民と罵ってたヤツが決闘を申し込んでるのに逃げるんだ、それじゃあ、卑怯者だね、

え？ 卑怯者って呼ばれたかったの？

それじゃあ、仕方が無いな

ヴァカス・ト・ロールくん」

「ヴィリエ・ド・ロレーヌだー！」

「ふーん。で、やるの？ やらないの？」

もう俺は、どっちでもいいよ

君が家名をふりかざすだけの単なる

卑怯者ってわかっただけでも」

「やってやるよー！」

糞虫は、逆上したようだ！

「そっか、そうだね、で、悪いんだけど
教師呼んできて貰えるかなできれば水の教師がいいな」
「もう、きておる」

ふと、声をした方を見ると、学園長のオスマンがいた。
先ほどのタバサとの騒ぎをみて、まずいと思ったのか
学園長室から急いで出てきたようだった。

「もういたんだ、まあいいや始めようよ、作法とかどうでもいいからさ」

糞虫は、先ほどタバサに落とされた杖を拾っている。

あーいいこと思いついちゃったや。

「ひいてはくれないか」

「うるさいよ学園長？」

「どうしても無理か？」

「無理だね、母を馬鹿にされて怒らないヤツなんていないでしょ？」

タバサが頷いた気がした。

学園長は仕方ないと、手を上げ開始を告げる。

「始め！！」

「名乗りとかいらんから、抜けよ糞虫。今度はちゃんと狙えよ？」

俺は、「風鉄扇」を抜くと同時に、『ブレイド』と『風糸』の呪文を紡ぐ。

風鉄扇は青緑の美しい刀身に姿を変えた。

視線が一瞬、風鉄扇に向いた瞬間、糞虫の杖に風糸をつける。

糞虫は、呪文を唱えようとした、糸を引く。

手から杖が地面に落ちる。

何が起こったかわかってないようだ。

「手が滑ったのかい？」

さあ、拾うといい。

「なーに君が構えるまで攻撃はしないよ」

糞虫は、杖を拾うと再び構える……糸を引く、また落とす。

「なあーに、疲れているんだろう、拾うといい」

拾う、引く、落とす。

拾う、引く、落とす。

拾う、引く、落とす。

拾う、引く、落とす。

拾う 拾う 拾う 拾う 拾う 拾う 拾う 拾う 拾う 拾う。

[illegible]

落とす落とす落とす落とす落とす。
落とす落とす落とす落とす落とす。

何十回続いただろうか。

気がつけば、糞虫が涙目になっていた。

「
・
・
・
・
・
・
け
で
い
い
」

「え？なに？聞こえないよ？」

「僕の負けでいい！！」

「ふーん？
で？」

糞虫は、驚いたようだ、
そしてすぐに激昂した。

「負けでいいって言ってるんだ!!」

「だからなに？ 糞虫が負けるとか勝つとか関係ないんだけど」

「なら、どうしてほしいんだよ!!」

「え、なにその態度？ 君はそんなに偉いの？」

「……………」

糞虫はついにしゃべれなくなったようだ。

なのでヒントを出してやる。

「“貴族”なりの頼みかたって言うのがあるよね？」

ただ、頭を下げて、

教えてくださいお願いしますっていうだけだもんね
超簡単。 子供にだってすぐできるよ。

「な、なんで平民なんかに、頭を下げないといけないんだよ!!」
逆ギレですか？

まあいいや

「糞虫君、名前なんだっけ？」

「……………ローヌ」

「え？ なに？ 家名も名乗れない”卑しい身分”なの？」

「ヴェリエ・ド・ローヌって、いつてんだろぅが!!」

「ふーんそれでさ、君、タバサに風をご教授願いたって、いつてた
よね」

「……………」

糞虫は答えない。

「いや、なにタバサの呪文は高度すぎるからね

僕が簡単なヤツを君に教えてあげるよ

大丈夫、君みたいな”子供”にも使えるヤツだから」

「だが、貴様なんかに!!」

ブレイドを解除して、風鉄扇を開く。

そして呪文を紡ぎ、扇を振るう。

『ウインド』

風の初期魔法である。

人1人は吹き飛ばせるであろう突風がふく。

糞虫はまた、壁に叩きつけられる。

な―に当たり所が悪くないなら死なないだろう。

「ちゃんと、悪い事言ったらごめんなさいしようね？

子供じゃないんだからさ。

そうだ、言い忘れてた、俺は”貴族”だから―！」

返事はなかった。

「やりすぎじゃ」

学園長が何か言ったようだが、俺の耳には届かなかった。

最後にもう一度だけ言うが、その日彼は、すごく機嫌が悪かった。

目を覚ましたロレーヌが一番始めに思ったのは、

自分に恥をかかせて壁に叩きつけたタバサと平民に

復讐してやると言う事だった、

そしてキュルケに恋人を取られた女子たちも、

彼の言葉を信じて、影ながら自分を磨く努力をしたが、

男慣れしているキュルケから恋人を取り返せる訳もなく、

どうにも収まりがつかなかった。

タバサには、勝てない事を学んだロレーヌは、こっそりと計画を練った。

そして、恋人を取られた彼女たちにある計画を話す。

女生徒連中は、彼に賛同し、それをもって復讐というグループが

生まれた。

彼ら、復讐が最も優先するべき事は、魔法薬の調合を得意とする
モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ
を引き入れることであつた。

その男、教育する（後書き）

風鉄扇は、『ウィンド』のみ、
ドッドの魔力で、人を吹き飛ばせる程度の効果が得られます。
それだけです。

他の特殊能力はありませんあくまで個人の趣味です。

その男、食い荒らす（前書き）

文才ないなあー

まあ書いてたら勝手に上がるだろうと現実逃避してみる。

その男、食い荒らす

グループ復讐の中には、秘薬や薬草、魔法液と言った物を取り扱う商人と親しい物がいたためモンモランシーを引き入れるのは、難しいことではなかった。

復讐の、計画が実行されたのは、新入生歓迎の舞踏会の日であった。

その日、カザネ・フォンリーフは、

黒髪が珍しいのか、上級生のお姉様方にダンスを申し込まれた。

正直上級生とのダンスなんかには全く興味は無かったが

「誘いを断るとするのは紳士としてあるまじき行為ですぞ」

という脳内セバスの声がして、外面は笑顔を貫き

内心、嫌々ダンスを踊っていた。

一通り踊り終わると、クラスメイトの女子に声をかけられた。

「あっちの方に珍しい料理があるみたいよ、君はもう食べた？」

ダンスに疲れていた彼は、いいやと首を振り

彼女が言っていた方へ歩いて向かった。

途中で、誰がキュルケを誘うかと言う話を上級生がしていたが、彼には何の関係もない問題なので華麗にスルーした。

料理は、見たことも無い珍味や、最近話題の甘味などがおいであつた。

彼は、ダンスでたまったストレスを解消するべく

周りの目を気にせず一心不乱に食い荒らした。

味は、よくわからなかった。

そんな彼の姿を見た人は思った、
普段どれだけ貧しい食事をしてるんだよ！？

一心不乱に食い荒らしたあと、飲み物がないことに気がついた彼は、

飲み物を探して会場内をぶらぶらしていた。

すると、こちらによってくる女性がいた。

眩しいほどの金髪の髪を縦に巻き、上部を縛る赤のリボンが特徴的だ。

「失礼、ミスターフォンリーフ」

「俺になにかご用かね、ミス」

「モンモランシですわ」

「モンモランシ」

「私、少しよってしまったみたいなのでこのワインを飲んでくださらない？」

おかしいと彼は思った、

しかし、喉の渇きが我慢できない物となっていたため

あえてそのワインを飲むことを選択した。

それは、別に女の子の飲み残しがホシイとかではなく
本当に、ただ、喉が渇いていたからだ。

「そうだな、先ほど食事をしていたのだから
なぜか、近くに飲み物がなくなてな

ちようど探し回っていた所だ

そいつをいただこう」

「ええ、おねがいしますわ」

ワインを一気に飲み干し、モンモランシを見た

「ありがとう、ミスモンモランシ」
一応礼を言っておく。

「キャーーーーー」

女性の悲鳴が聞こえた。

事件か？　と思ひ悲鳴のした方を見ると、

ズタズタに切り裂かれたドレスを身にまとったキュルケがいた
野性的なドレスだなと思っていたら、ズタズタの衣装が
キュルケの体から落ちる。

一系まとわぬその姿でも、彼女の体は磨き抜かれた美を表現していた。

（見事だ！！）

内心そう思ったが、口に出してしまうとセバスと

同等の人間になってしまったためそこはグツとこらえた。

裸の彼女に誰かがマントを掛けていたようだが

興味が無かったため目を向けることをやめた。

そして俺は、紳士らしく会場から立ち去った。

気がつけばモンモランシはいなかった。

SIDE：キュルケ

「キャーーーーー」

全くうるさい女連中だ。

たかだか、服が破けたくらいで何でそんなに叫べるのか理解できない。

淑女なら、もう少し気品を持ってほしい。

貴女たちのようなみすばらしい体ならともかく、

私は裸でも十分キレイだ。

とりあえず、このまま中央に居座るのは
舞踏会の会場を作ってくれた上級生に悪いと思ったので
端にあるソファーに移動する。

「涼しくなったわね。」

不意に出た。

「災難だったね」

背後から男の声がした。そしてマントを掛けられる。

「いったい誰がこんな事を？」

「だいたい見当はつくわ」

私は、隅のほうでクスクスと笑う女子グループを見てそう呟いた。
「そういえば、君は、あの”平民”と付き合っているとい噂を聞いたのだけど」

平民というのは、今会場を出て行った黒髪の彼の事だろう。

「さあ、どうかしらね」

私は、否定しなかった。

それは、単なる気まぐれだったけど、

次の彼のセリフで殺さっきの受け答えは正解だったと思った

「彼から伝言があるのだがね」

「なに？」

私は、下品な笑みを浮かべる彼の言葉を聞き逃さないように耳を
傾けていた。

SIDE：カザネ

昨日は、”すごく面白い薬”が手に入ったため、眠らずに研究し
ていた。

なんというか、すごい、学生の身分でここまでよく出来た薬を
作れるなんて、正直トリステイン魔法学園を舐めていた。

徹夜で研究していたが、薬草が一つもわからないで感動した。
魔法の授業とかよりも、優先するべきはこの薬についてだ！

「昨日は研究で忙しかったから、
俺は今日何があっても起きない本当に爆睡する、おやすみZZZZ」
隣の席のタバサにそう言っただけで枕に頭を沈める。

SIDE：タバサ

「昨日は研究で忙しかったから、
俺は今日何があっても起きない本当に爆睡する、おやすみZZZZ」

そう言っただけで彼は眠ってしまった。教室に枕しかもってきてなかった所を見ると

計画的な犯行だ。目の下の隈が昨日の夜は全く眠れなかったと物語っている。

睡眠と読書以外に、彼を夢中にさせる物に全く興味がない。
彼が目覚めたら聞いてみよう。そう思い本に集中する事にした。

っドンー！

と言う音とともに一人の女性が隣に腰掛ける。
そして、本を取られる。

「貴女、いったいどういうつもりなの？」
燃えるような赤髪の女性、は黒い布のような物を机に叩きつける。

「????」
訳がわからなかったので首をかしげて彼女の目を見た。
「高かったのよ」

黒の布をよく見てみると、高級ドレスなどを発注している
メーカーの刺繍のような物が見えた。

「私に恥をかかせて、それで勝ったつもり？」
「????」

私は、なぜ彼女がそんなに憤慨しているか訳がわからなかった

「あなた、『風』が得意なんでしょ？」

影からこっさりつむじ風を飛ばすなんていやらしいわね」

「わたしじゃない」

私は、何の話かわからずとっさに否定したが、

彼女は本当に怒っているようでこっちの話を聞こうとしない

「あら、とぼけるつもり？ 貴女にも同じような目に遭わせてあげるから」

彼女はそう言うのと別の席へ移ってしまった。

その放課後、部屋に戻ると焦げ臭い匂いがした。

中に入り匂いのした方へ視線を向けると本棚から

彼に借りた本だけが無くなっており

その近くには無残な燃えカスが落ちていた。

これは、戦争の始まりを告げる合図だろうか……。

SIDE：カザネ

授業中爆睡して気がつけば放課後だった。

背伸びをして、部屋に戻った。

戻って、少しのんびりしていると部屋をノックされた。

「どちら？」

「タバサ」

珍しい事だった、

いつも教室でしか会話しない彼女が俺の部屋に来ることもそうだが、

彼女を纏う空気が、以前感じた冷気のような

冷たさを発していた事が異常だった。

「何事？ まあ、中に入りなよ」

俺は、ドアを開けると彼女を部屋に招いた
彼女は部屋に入り頭を下げた。

「ごめんなさい」

訳がわからなかった。

「どうした」

話を聞く限り、彼女に非はなく

部屋に帰ると本が燃えていたと言う

それはどうしようも無い事だったという事がわかる。

「立会人をしてほしい」

タバサは、続けて言う。

「立会人？ 誰と戦うの？」

「ツエルプストー」

タバサは静かだがはつきりとした声をもってそう告げた。

その男、跳躍する（前書き）

キュルケ VS タバサなんてさせねえよ？

その男、跳躍する

真夜中、

中庭のある一角に男子生徒の集団が

1人の男を、円で囲むように陣取っていた。

数は11人。

囲まれている男は、黒髪赤目のひよろつとした体格で腰には独特の形をした剣、日本刀と歪な形をした杖を差している。

周りの男たちは皆、集団で獲物を狩る獣のようにじわじわと距離を詰めようとしていた。

「まあ、まちたまえ諸君

皆を代表して、初めに

このヴィリエ・ド・ロレーヌが」

一人の男が声を張る。その立ち振る舞いからして、おそらくこの集団を仕切っているであろう事がわかる。

「これから、決闘を行う！！ 杖を構えたまえ」

周りの男たちは距離をあけ、

ラインメイジである

ロレーヌの魔法に巻き込まれないようにした。

ロレーヌの前方にいた黒髪の男は

やれやれといった表情をうかべ

腰に差してある”杖”を右手で抜き構える。

抜いた杖の形も歪であつたが、構えも歪。

相手との直線上に左足の正面を向け

右手で持つ杖を顔の横へと持つて行き地面と水平に構え
左手は左足の上方

魔法使いとは思えぬその姿は、弓を引く兵士に近い物がある。

「ヴィリエ・ド・ロレーヌだ

前回の戦えなかった借りを返させてもらう」

「フォンリーフだ。 ”君の策と作らせた薬” に感動した
故に、君たち全員に

”空前絶後の風”をお見せしよう

さあ、君たちも抜くといい、抜いた物から眠ってもらう」

そう言つて、彼を取り囲む男達を見た。

男たちは、笑うだけで。

誰も杖を抜こうとしない

「なるほど、決闘だから始まりの合図が必要なのか、
よろしく頼むよトロール君」

ロレーヌだ！ と男は口にしたが、

黒髪の男の耳に、彼の言葉は全く入らないようだった。

しかたないと、杖を構え直し叫ぶ。

「 ”開始” だ」

風が吹いた。

弱小であつたが、木葉を乗せて飛ぶにはちょうどいいほど。
瞬間、黒髪の男が消えていた。

「訂正しよう、時間が無くなった。

杖を抜かずとも眠ってもらつ、彼のように」

声がする。

その場所は、先ほどまでヴェリエ・ド・ロレーヌが立っていた場所。

黒髪の男は、いとも簡単にロレーヌを蹂躪した。

続けて声を発する。

「言い忘れたが、今君たちが立っているそこは、俺の間合いだ」

これから、蹂躪されるであろう男たちの悲鳴がこだまする。

S I D E : タバサ

遅い。

私は確かに、中庭にきてほしいと言った。

もう、約束の時間は過ぎている。

場所がわからないと言うことは、多分ないと思う。

「遅いわね。」

「いつたい、いつまで待たせるつもりかしら」

ツエルプストーは呆れ顔でそう言う。

自慢の赤髪のをいじり、枝毛を探しているようだ。

「立会人がくる」

私は、そう答え、キユルケを見る。

キユルケは、驚いた顔をしたして髪の枝毛探しをやめた。

「あら、貴方も？」

私も証人件立会人を呼んだのだけど、彼も遅いわね」

「証人？ なんの？」

「まだとぼけるの？」

はあ、と息をつき彼女は続ける

「舞踏会で、私のドレスを”貴方の風”が切り裂いたのを見たという人よ」

「私じゃない」

「じゃあ何で貴方は私と決闘するのかしら」

「貴方が、私の借りていた、本を燃やしたから」

「はあ？ 私じゃないわよ、

何で私が貴方の本を燃やさないといけないのよ

「……そういえば、彼もそんなこと言ってたわね」

「彼？」

「黒髪の彼よ、あの”平民”とか呼ばれて喜んでる」

「フォンリーフ」

「そう、たしかそんな名前だったわね」

「私の呼んだ立会人」

「あら、貴方も？」

「おかしい」

「ええ、たしかに」

「ギャーーーーーーー」

不意に、遠くの方で悲鳴がした。

「ねえ、まだ戦ってないけど、一時休戦しない」

「いい提案」

私とツエルプストーは、声がした方へ移動した。

SIDE：学園長

学園長室の席の机の引き出しの上から2番目の書類の下に隠された本を手取る。

この”本”を手にするまでどれだけの月日と金と時間を掛けたか。

さて、それじゃあ、読むとしようかのう。

「ギャーーーーーーー」

誰じゃ、こんな夜中に叫ぶ馬鹿は、それにしても『サイレント』を掛けておらんかったとは、うかつじゃったわ。

さーて続きを。

学園長室のドアが凄い勢いで開く。

「学園長！！！！」

一人の教師が部屋に入ってくる。

咄嗟に本を尻の下に隠す。

「なんじゃ、こんな夜更けに。」

また、ヴァリエール家の三女がなんかやかしたのう」

「ちがいます、

先ほど生徒が群をなして一人の生徒をいじめている
という報告がありました。 場所は中庭です」

面倒くさいと思ったが

わしが管理し取るこの学園で、いじめなぞ絶対にゆるさん。
立ち上がり、学園長室を出る

（ちょっとまっておってくれ、わしのボインちゃん達）

SIDE：カザネ

阿呆を倒すときに、使った

『牙』はすこしやり過ぎたと思ったので
杖を腰に戻す。

当ててないんだよ？

ちよつと風圧で小突いただけだよ？

鉄扇を当てたら頭割れちゃうからね。

脱落1名

逃げる者3人

攻撃しようとする者3人

思考停止4人

”風”が一对多でまずやってはいけないことは、
間合いの外に敵を
出すことなので初めに逃げる者を狩る！！

”足下の阿呆”を潰さないように
地面を踏み込み跳躍する。

【九鬼流・風・移動術
『影歩』

決して影の歩みに追いつかれないように、するべし】

着地地点にいた1人の頭を足で揺らし眠らせる。

近くにいた2人は手が届く範囲だったので

拳で軽く顎を小突いて眠らせる。

再び跳躍。

次に、攻撃してくる者を狩るべし。

攻撃の中で一番やっかいなのは、

追尾してくる”火”

次に、見えない”風”

そのほかは、どうにかなる。

攻撃している二人の間で

でかくなる火の玉>ファイヤーボール<
土の中からゴーレムの頭が沸く。

攻撃してくるヤツのどちらかが”火”だ。

もう一人は”土”

ドット、ライン、トライアングル程度のゴーレムじゃ
俺は止められんので土は後。

右か左か。

筋肉質か華奢か。

金髪か緑髪。

あーめんどくせえ、右だ。

腰の鉄扇を抜いて開き

筋肉質の男に進路を取る

狙いを定める。

足で頭を揺らす。

ゴーレムの動きが止まる。

間違えたーーーーー!?

叫びたい気持ちを抑え、思考停止組の方へ飛ぶ。

人の頭ほどのファイアーボールが迫る。

（ごめんね）と内心つぶやき二人を生け贄にした。

後の2人は例のごとく顎を小突く。

ファイアーボールが2人に当たったのを確認して頭を揺らす
そして、跳躍。

最後に”火”の魔法使いを無効化。

「ふう」

杖をなおして。

腰を地に着け、空を見る。

「本日は、疾風注意。

所によつては、火がふります。

お出かけのさいは、1人の風にご注意くださいってね」

「やっぱ、静かな夜には、この二つの月がふさわしいさね」

頭の中で、

癖毛のひどい長髪 of 黒髪で泣きぼくろ

独特の服と刀が似合う女性の声がした。

「なにこれ」

いつの間にか後ろにいた

燃えるような赤髪のキュルケが呟いた。

隣には、タバサがいてこちらを見ている。

後ろには、隠れきれない女性と連中が見える。

「こいつらが犯人の半分、

あとは、後ろからつけてきてるその女連中」

ビクツと体を揺らし我先に逃げる女子連中。

「私、（男を）捕まえるのは得意なのよ、
行きましよう”タバサ”

貴方も何かされたんでしょ？」

そういうと、キュルケは逃げた女性と連中を追う。

「後で事情を聞かせてもらう」

「できれば明日にしてくれないかな、朝食の時間で」

「わかった」

こくりと頷くとタバサはキュルケの後を追って行ってしまった。

「なんじゃ、こりゃ」

遠くから、学園長の声がする。

後ろには名も知らない教師がついてきており

この惨状を見た瞬間校舎に走り出した。

おそらく水メイズ教師をおこしに行ったのだろっ。

（さて逃げようかね）

夜の学校に、茶色のマントの風がふく。

その男、跳躍する（後書き）

次回で、一章最後

その男、説明する

朝 食堂

「それで、話してくれるんでしょうね」

燃えるような赤髪の女性キュルケは、
そう言って俺を見る。

キュルケの隣にはタバサ

その正面に金髪クルクルの女性モンモランシーと
金髪でバラをもった男性ギーシュがいた。

「何から話そうかね」

「その二人は関係者？」

俺が迷っていると、タバサが口を開く。

「そうだな、まずはそっからか。

んじゃ2人とも自己紹介よろしく」

「モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ
よ」

「ギーシュ・ド・グラモンだ」

「次に君たちが、今回やった事をどうぞ」

「『魔封薬』精神力を魔力に変換する事を封じる薬を作って、

舞踏会の日、貴方に飲ませたわ」

「舞踏会の日、夜の夜に彼女の罪を許して貰えるように、君に進言した」

「ふーん……って魔力を封印されて貴方大丈夫なの?！」

「え? なにが?」

「なにがって……授業とか」

「彼は、いつも眠てる」

キュルケの発言に対してタバサのツツコミが入る。

そうだったわね、とキュルケは頷き口を閉ざす。

そんな、失礼な!!

たまには俺も授業を受けます。

風の授業とか。

風の授業とか

あれ?

俺寝てばかりじゃね?

どっから説明しようかな……。

そうだ、舞踏会の初めから説明するか。

「んじゃ、舞踏会の日から話すから、

気になることがあったら、聞いてね」

頷く4人。

「まず初めに、俺が、モンモランシーに薬を盛られた」

「そして、舞踏会の日キュルケがドレスを破られて」

「ド・ロレーヌから聞いた話だと、”貴方”がタバサが犯人だって
キュルケが割り込んでこっちを見る。

ヤケに貴方と言っ言葉を強調していたが

「俺は、そんなこと言っていないので、それは彼の嘘だね」
それを一刀両断。

「そして、部屋に戻るとギーシュがきた」

「会場で彼女を探していたら、
君から離れていく彼女が見えて話を聞いたのさ」
彼女って言うのは、モンモランシーの事ね、と補足する。

「そこで、”貴方”の怖さと強さを聞いたわ
『ウインド』のみで彼を倒した事とかね」

そういえば、貴方ってスクウェアなの？
とキュルケの質問に対して

ただの、ドットだよ！
と返しておいた。

その時、ドットであの『ウインド』はおかしい
とタバサは呟いたが

無視して続ける！

「俺は、ギーシュの言うとおり魔力が使えない体になってた」
「で、許してやるからその薬の予備を寄越せと言った」

「君が魔力を取り戻したら、僕のモンモランシーが傷つくからね」
彼女を守るために君と戦っても、

勝てる気がしないからねと付け加えるギーシュ。

「ギーシュ」と恋する瞳のモンモランシー。

ストロベリー空間うざいっす。

でもまあ、あの強さの『ウインド』を見せられたら他の呪文はもっとやばいと思うのは仕方が無いよな。

「それで？」とタバサ。

「僕が、モンモランシーが持っていた予備の薬を彼に手渡したのさ」
「一回で薬を確実に飲ませられるわけないから、必ず予備があると
は思ってた」

軽く、ギーシュの発言を補足する。

「で、薬を朝まで研究してたんだけど……そういえばアレ
すげえな」

マジで感動したわ!!」

そう、思い出した。

あれから調べたが、全くわからなかった。

そんな興奮している俺を見て
若干ひいたモンモランシーは

「わ、私は本に書いてあった通りに作っただけで、
本来はそんな技術無いわ。それに、メインは”香水”なの」

香水か、興味ないな。

それよりも、その本っていうのが気になる、
いったいどんなやつが書いてるんだ。
とりあえず

「そうか、今度その本を貸してくれ!!」

「・・・話がそれてる」

タバサが口を挟む。

そう言われても、朝は俺、寝てたし。

「で、昨日の朝は、なんかあった?」

「ドレスの事で、怒鳴られた」

「だって、”貴方”が言ってたって」

「あーはいはい、それで?」

「”貴方”に借りていた本が燃えていた」

あ、そういえばそうだったな。

あれは、俺の本だからいいけど、
もし”アクア”さんのヤツだったら、死んでるぞ
俺が。

「本燃やしたヤツに金請求するから、後で誰がやったか教えて」
「鬼だね、君は」

「いやいや、俺は、生ぬるい方だよ・・・祖母なんて
続けようとしたが、タバサが割り込む。

「脱線してる。私が、”貴方”の部屋を訪ねた」
「そうそう、タバサがきて立会人を引き受けた後に

相手のキュルケが、きたんだよね」

「貴方に立会人と証人をしてほしいと頼んだわ」

「そうだね、そこでおかしいと思った俺は、立会人を引き受けて、” トロール君 ” の所に行ったわけだ」

「あそこで、嘘だと教えてほしかったわ」

「トロール君って誰だい？」

「ド・ロレーヌね、多分」

「すまないねキュルケ、あの時はまだ君を信用してなかったんだ俺の本を燃やしたのが誰かわからなかったしね」

「もし、あたしの炎だったら、灰なんて残さないわ」
「だろうねと頷く。」

「んでそいつの所にいった時、なんて言っただと思う？」

「さあ、どうせ貴方をおちよくるような事でも言っただんでしょ？」

「” お前魔力を使えないだろ、黙ってないと痛い目みるぞ”
だって」

「んで、” 痛い目って具体的には？”
って少しお話してると」

「夜中なのに、キュルケと付き合いたい奴ら集めてたらしくて、決闘しろだって」

「イヤーあれには参ったね、思わず中庭まで逃げちゃたよ」

「逃げる君を見た僕は、先生にその事教えたさ」

助かった、ありがとな
といっておく。

「中庭まで、逃げたんだけど、捕まってさ
モンモランシーの薬の事を聞くと
仲間（女性グループ）の事も教えてくれたってわけ」

「話し終わると、杖を突きつけられてさ

「そうよ、魔法を封印されてたのに、よくあの人数に勝てたわね」

と立ち上がり、テーブルを叩いて割り込むキュルケ

「いや、よくわからないけど
いきなり火のメイジが仲間を攻撃しだしてさ
そのどさくさに紛れて隠れたんさ、
んで最後まで立ってたトロール君だけ倒したってわけさ
まじで、ラッキーだったわ」

「なによそれ」

「いや、俺にもよくわからない。
多分、君を独り占めしたかったんじゃない？」

私って罪な女ね
とまんざらでもないご様子のキュルケ。

「えっとそれで？」

はげた教師が小走りに、こちらの机にやってくる。

「食事の途中にすまない、黒髪の君」

「フォンリーフです」

すかさず答える。

「ああ、すまない、ミスターフォンリーフ

学園長が呼びだ。 学園長室にまできてくれ」

「わかりました。すぐに向かいます

悪いね、ってかだいたい今のが今回あった事ね」
席を立ちテーブルを後にする

ああそうだ、振り返りモンモランシーを見る

「モンモランシー本の件よろしくね」

そういつて食堂を後にした。

その時、『黒ノ夢』を落としていた事も気づかずに

学園長室に向かう途中、はげた教師と話をする。

「授業の前なのにすまないね」

「いや、先生は悪くないですよ、それにしても俺なんかしましたっけ？」

昨日の事は、多分ばれてないはず。

ばれてたらあの11人が口を開かないように

O H A N A S I しないとな。

「私も、君を呼んでくるように言われただけで、詳しく知らないんだ」

すまないね と謝るはげた教師。

そういえば、名前知らないや。

「いや、こちらこそすみません。 えっと」

「コルベールだ。 ジャン・コルベール」

「それじゃ、コルベール先生とお呼びします」

そうこうしているうちに学園長室についた。

ドアをノックして入る俺と、コルベール先生。

緑髪を上で束ねている女性に踏みつけられて喜んでいる学園長

「えっと、失礼しました」

「まつんじゃー」

叫ぶ、学園長。

「学園長の、特殊な性癖について、俺は、何も知らないし見てないです」

「ちがうんじゃー」

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

「つまり、ミスロングビルの下着をこのじじいが、覗いた結果だと」

若干顔を赤らめて頷く秘書の女性ミスロングビル。

「学園長が悪い」

先ほどまで空気と化していたコルベール先生が言う。

「まあ、いいや学園長、俺にお話って何？」

「二人は席をはずしてくれんかのう？」

学園長は、そういうとロングビルとコルベール先生を部屋から追い出す。

「で？」と俺は言う。

「今回の、決闘の件じゃが」

「何の事かな？」

「とぼけるのかのう？」

瞳の奥をのぞき込んでくる学園長。

「じいさん、か弱い一般生徒を疑ってはいけないよ」

「“慈愛”の息子であるお主が、か弱いわけあるかい
まったく学園に来るたび、問題ばかり起こしおって」

「昔のことは水に流して、昨日の夜の話をしましよう」
「簡単に、自白しよったな」

「いえいえ、昨日の夜は月がキレイだったなあと」
「もういいわい」

「そうですか、それでは、帰らせていただきます」

「のう、カザン」その名で呼ばないでいただきたい、オールド・オスマン」

「ふお、すまんのう」

「まだ、名前は刀と共に“宝竜”に預けているので」

「あやつは、今どこをふらついておるのかのう」

「しりませんね、あいつの動向とか興味ないですし、それで何のようですか？」

「まだヴァリエール公爵を………」

と叫びかけた学園長

しかし、勢いよくドアが開けられてその話は中断される。

「フォンリーフ。」

君の本を手にとったモンモランシーが突然倒れた」

息をきらして汗もふかずにギーシュが、俺の服の首元を掴んだ。

俺は、首元を掴まれながらも腰の後ろに手を回し黒ノ夢を確認するが

本はそこにはなかった。

あれ、おかしいななんでだろう

冷や汗が止まらない。

もう一度探す事にする。

ない。

探す。

ない。

探す。

ない。

「学園長、最速の伝書フクロウを貸していただきたい!!」

その男、説明する（後書き）

落ちてない？ ごめんなさい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9068v/>

ゼロの使い魔 - 刀を持つメイジ -

2011年8月24日08時32分発行